

# 『夫木和歌抄』所収萬葉歌について ―人丸関係の短歌を中心に―

樋口 百合子

## 一 はじめに

『夫木和歌抄』（以下『夫木』と略称する）は、一三〇〇首余りの萬葉歌を所収する。先にそのうち一二〇首の長歌について考察し、非仙覚本系統であるが、現存する萬葉集古写本と異なる訓を持つという結論を得た<sup>①</sup>。本稿では、残る短歌について考察を加えたい。

『夫木』所収短歌は一千首を超える。概ね萬葉集古写本に依拠したと推定される長歌と異なり、『夫木』以前に多くの歌集・歌書に所収され、それを典拠とする萬葉歌がかなり含まれていることから、萬葉歌の流入の過程は複雑であろうと推定される。この短歌をひとまとめにして考察を加えても、有効な結論を見出し得ないであろう。短歌を依拠した文献により分類し、それぞれに相応しい処理の仕方が要求される。

本稿ではその第一段階として作者名を「人麻呂・人麿・人丸」（本稿では『夫木』で用いられている「人丸」を用いる）とする歌を対象とし、所収短歌の特質の一端を討究する。「人丸」関係の短歌を対象とし

たのは、ある程度の歌数が期待できるものであること、家集を持ち、多くの歌集・歌書に引用され、『夫木』流入の過程の腑分けが行いやすいのではないかと考えたことによる。

## 二 柿本朝臣人麻呂集と人丸集

『柿本朝臣人麻呂集』は柿本朝臣人麻呂が編んだとされる私家集で、写本としては伝わらず、『萬葉集』に「右一首柿本朝臣人麻呂之歌集出」といった形式で引用されている。引用総歌数の認定には諸説あり、短歌三三六～三九三首、旋頭歌三十五首、長歌二首が残る（『和歌文学大辞典』<sup>②</sup>に拠る）。一方『人丸集』は柿本人麻呂の家集として、平安期に編纂された歌集で、「人麿集」「柿本集」など種々の名称がある。こちらは現在大きく五系統に分かれる。

### I 一類本

①書陵部蔵（五一・二）本「柿本人丸集」二四一首

②書陵部蔵（五〇六・八）本「柿本集」新編国歌大観底本 三

〇一首 国名隠題歌あり

### II 二類本

③書陵部蔵（五〇一・四七）本「柿本集」六四四首 国名隠題

歌あり

### III 三類本

④冷泉家時雨亭文庫蔵義空本 冷泉家時雨亭叢書72（朝日新聞社 二〇〇四）『素寂本私家集 西山本私家集』所収「柿本人麿集 義空本」七六六首

#### Ⅳ四類本

⑤冷泉家時雨亭文庫蔵定家様本 冷泉家時雨亭叢書78（朝日新聞社 二〇〇五）『詞林采葉抄 人丸集』所収「人丸集」片仮名書 二九六首

#### Ⅴ五類本

⑥大東急記念文庫蔵本 『大東急記念文庫善本叢刊 中古中世篇6 和歌Ⅲ』（汲古書院 二〇〇八）「人丸集」一四五首  
国名隠題歌あり

『新編私家集大成 CD-ROM版』（エムワイ企画 二〇〇八）、池原陽斉・藤田洋治・朝比奈英夫『萬葉集』及び『人麿集』五系統歌番号対校表―附・大東急記念文庫蔵『人丸集』翻刻』『古代中世文学論考』第34集（古代中世文学論考刊行会 新典社 二〇一七）に拠る。

本稿では『萬葉集』に引用された歌集を「柿本人麻呂集」、平安期成立の家集を「人丸集」とし、「人丸集」を、右の②を人丸集

①を人丸集Ⅰ ③を人丸集Ⅱ ④を人丸集Ⅲ ⑤を人丸集Ⅳ ⑥を人丸集Ⅴとした（②①が一類本 ③が二類本 ④が三類本 ⑤が四類本 ⑥が五類本）。『夫木』は人丸歌を採取する時に何を典拠としたのか、『萬葉集』とすればその『萬葉集』はどのような写本であったのか、『人

丸集』をはじめとする私家集及び私撰集からの引用であったのか、またその特質は長歌の考察と矛盾しないものであるのかについて調べたことを報告するものである。

『夫木』所収の作者名が「人麻呂・人麿・人丸」と記されている歌は二四三首、そこから長歌三十五首、旋頭歌九首を除く短歌の数は一九九首（上記の数はいずれも重出歌を含む）であり、これを考察の対象とする（以下この人丸関係の短歌を短歌と称するが、『夫木』所収のすべての短歌をさすものではない）。

### 三 写本と刊本

先に長歌の考察において、刊本には寛永版本・西本願寺本等仙覚校訂本による修正が行われ、写本と刊本の間には乖離が存在すると述べたが、短歌でも同様の事が言えるであろうか。本稿では長歌の考察と同じく、『夫木』は静嘉堂本を底本とし宮内庁書陵部本・永青文庫本、寛文五年版本を参照し『萬葉集』寛永版本・西本願寺本・廣瀬本とを比較し、修正の有無を検討する<sup>③</sup>。

考察の対象とした一九九首は『萬葉集』に見えない歌二十五首を含む。それを除いた一七四首の短歌から三首を挙げて比較してみる（静||静嘉堂本、書||宮内庁書陵部本、永||永青文庫本、刊本・刊||寛文五年版本、寛||寛永版本萬葉集、西||西本願寺本萬葉集、廣||廣瀬本萬葉集をそれ

それぞれを表す。その他萬葉集古写本及びその略称は『校本萬葉集』に従う。

【例一】三・303（二十三・10300 万三 人丸）

（数字は『萬葉集』『夫木』新編国歌大観番号〈巻次と歌番号〉、『萬葉集』

は旧番号を表す。括弧内の数字は『夫木』を表す。以下同）

【静嘉堂本】①名に高きいなみの海の中津波 ちへにかくれぬやまとし

まねは（写本間の異同は以下に示す。以下同。宮・静異同なし）

【刊本】①名くはしきいなみの海の沖津波 ちへにかくれぬやまとしま  
ねは

【西本願寺本・寛永版本】①名細寸 稲見乃海之 奥津浪 千重尔隠奴

山跡嶋根者

（西本願寺本・寛永版本の異同は次に示す。以下同。①ナクワシキ〈寛訓〉）

【廣瀬本】①ナニタカキイナミノウミノオキツナミ ちへニカクレヌヤ

マトシマネハ（廣瀬本は訓のみ示す）

①初句は写本三本は「名に高き」で異同はなく、類聚古集、廣瀬本、紀州本に一致する。刊本は「名くはしき」であり、西本願寺本、寛永版本に等しい（仮名遣いの違いは除く。以下同）。西本願寺本では「モト青」で、仙覚改訓とおぼしい。刊本において、仙覚校訂本により修正したと思われる。『和歌童蒙抄』や『五代集歌枕』においてもここは「なにかき」とする。

【例二】十・1890（二・439 万十 人丸） 新点歌

【静嘉堂本】①はる山の②ともうくひすのなきわかれ ③かへりみし

ま、思ひますわれ（①春山〈静〉）

【刊本】①春日野に②いぬる鶯なきわかれ ③かへりますほとおもひますわれ

【西本願寺本・寛永版本】①春日野 ②犬鶯 鳴別 ③脊益間

思御吾

【廣瀬本】①ハルノヤマ②ノタケウクヒスナキワケテ ③ハルノマスマ

ニオモヒミワカモ（朱片仮名左傍訓）

新点歌とされるが、「赤人集」や類聚古集に訓があり、平安期から既に訓まれていた。訓が問題とされる歌であるが、本稿は訓について述べるものではないので、その当否には触れない。これを見ると、『夫木』写本の三本は一致する（永青文庫本の初句は「の」一字の脱落か）。一方、刊本、西本願寺本、寛永版本の三本が一致し、これらと全く異なる訓を持つのが廣瀬本である。これをみると『夫木』写本と刊本は異なり、【例一】と同様、刊本において仙覚校訂本による修正が行われたといつて良いであろう。参考までに写本と同じ訓を持つ文献としては『類聚万葉』（書陵部本、成立は十三世紀中後期）があり、『歌枕名寄』（以下「名寄」と略称する）は刊本にのみ見え、こちらは仙覚校訂本に一致する。

これらを見れば、刊本は仙覚校訂本により修正を加えたことは確かなのであるが、この二首はいずれも集付に「万三」「万十」という集付を持つ。ところが『夫木』と萬葉集古写本との間に異同があ

りながら、刊本に修正が見られない歌がある。集付を「家集」とする歌である。『夫木』の人丸関係の歌で集付が「家集」とあるものは二十八首あり、そのうち十六首が『萬葉集』にない歌である。残りの十二首のうち、『夫木』と西本願寺本の訓が異なる歌は少なくないが、十一首の歌に修正が見られない。その中で修正されたと思しき歌が一首ある。

【例三】十・2262（十一・4131 家集 人丸）

静嘉堂本 秋萩をちらす①しくれのふる比は ひとりおきゐてこふる夜そおほき（宮・永異同なし）

刊本 秋萩をちらす①なかめのふる比は ひとりおきゐてこふる夜そおほき

西本願寺本・寛永版本 秋芽子乎 令落①長雨之 零比者 一起居而

戀夜曾大寸

廣瀬本 欠

二句「しくれの」は刊本では「なかめの」とあり、西本願寺本、寛永版本に一致し、修正されたと思われる。刊本はこの歌において集付が「家集 万十」とあり、「万十」が加えられている。これにより『萬葉集』と認識され刊本において修正された。他の十首は「家集」のみであり、『萬葉集』と認識されず修正されなかったのではなからうか。

萬葉集古写本には「しくれの」はなく元暦校本、紀州本、京大本

左代緒（緒ニテ右ノ訓ト入レ換フ可キ記號ヲ附セリ）において「ナカアメノ」とあるのみである。人丸集Ⅰでは「おとす時雨の」、人丸集Ⅱ「おとすなかめの」、人丸集Ⅲでは「チラスナカアメ」とあり、『夫木』と一致する歌句を持つ歌集は『玉葉集』のみである。『夫木』と成立年代に近い『玉葉集』とは全歌句一致するので、同じ資料を見ていた可能性も否定できない。『夫木』所収短歌は、人丸集からの採歌としても、現存しない人丸集ということになる。この他に『夫木』以前の歌集・歌書に、「しくれの」とあるものは見当たらない。

【例四】十・2111（十一・4111 秋二 家集 人丸）

静嘉堂本 ①たまほこの君がつかひの②たおりたる ③なごの秋はき

④見れとあかぬかも（④見あかぬかも（永）、宮・刊本異同なし）

西本願寺本・寛永版本 ①玉梓 公之使乃 ②手折來有 ③

此秋芽子者 ④雖見不飽鹿裳

廣瀬本 欠

【例四】は『夫木』写本・刊本間に異同はなく（結句の永の異同は脱落か）、西本願寺本・寛永版本と、初句三句四句に異同のある歌である。初句は元暦校本・紀州本と、三句は元暦校本・紀州本・類聚古集と一致する。四句と一致する萬葉集古写本はない。歌集・歌書を見ると『古歌抄』・『二葉抄』も「たまほこのたをりたる」とあり、『夫木』と一致する。当該歌も仙覚校訂本を受容していないことは明白である。集付が「家集」のみの歌は刊本において修正されなかつ

たのではないだろうか。なお人丸集では一類本の二本、二類本に所収されるが初句二句のみ『夫木』と一致する。四句は『夫木』独自訓であるが、『夫木』写本・刊本間に異同はないので、原撰本以来の訓であり、それは人丸集現存諸写本と異なる、特異な訓を持つ写本であったようである。

【例一】【例二】【例三】を含め『夫木』写本三本が一致し、刊本と異同がある例は一七四首中に三十首ある。この三十首は刊本において、仙覚校訂本により修正したと思しいが、異同も少しある。

三十首中二十九首は集付に「万」「万二」などの集付のある歌、もしくは集付のない歌で（三首）、『萬葉集』以外の集付の記された歌は【例三】に掲げた卷十・2262番歌のみである。

以上から『夫木』所収の短歌は長歌の時と同じく、刊本には修正が加えられ、写本が原撰本成立時の状況を伝えていることが判明した。従って以下の考察は刊本ではなく、写本―静嘉堂本に依拠し書陵部本・永青文庫本を参照することとする。なお写本三本は異同もあるが、その数は多くない。

#### 四 集付「家集」から

前節の考察から、人丸という作者名を持つ歌には「家集」から採取したと思しき歌があった。作者名「人麻呂・人麿・人丸」と記さ

れた歌の集付を整理すると以下のようなになる（萬葉歌でない歌を含む。二つ以上の集付を持つものは③に分類し、それぞれにも加えた）。

①「万一・万」の如く『萬葉集』の集付のあるもの 一九三例（重複を含む。以下同）

②『萬葉集』以外の集付のあるもの

1 家集 二十八例

2 雲葉和歌集 三例

3 万代和歌集 三例

4 明玉集 一例（永のみ）

5 古今和歌六帖（以下『六帖』と略称する） 五例（六帖・一例、六五・四例）

③「万一・万」「家集・万二」の如く『萬葉集』の集付、もしくは『萬葉集』の集付とそれ以外の集付が重複して記されているもの 二例

④集付のないもの 十六例

①の『萬葉集』の集付があるものが最も多いが、『萬葉集』以外では②の1「家集」の二十八例が多い。これは人丸集を典拠とするものと思われる。『夫木』は他の歌集と比較すると「家集」の集付が多く記されている。『新編国歌大観』中「家集」の集付は一九六九例（詞書・左注含む。以下同）、そのうち『夫木』は一八〇九例と大半を占める。『名寄』をみると僅か六十七例であるので、『夫木』の歌数が『名寄』のほぼ二倍としても、『夫木』の多さは際立つ。

私家集を資料とし、それを集付に丁寧<sup>テイネイ</sup>に記す傾向があったということである。この人丸関係の二十八首は『萬葉集』にある歌が十二首、『萬葉集』にない歌が十六首である。この二十八首を「萬葉集にある歌」、「萬葉集にない歌」に分け、それぞれを西本願寺本・廣瀬本現存人丸集と比較し、その関係を見ることにする。「夫木」は静嘉堂本に拠り、宮内庁本と永青文庫本を参照、異同のある歌句のみ記す。人丸集は五類のうち歌を所収するもののみ記す。(2) 以下は西本願寺本、廣瀬本、人丸集諸本は『夫木』と異同のある歌句を記す。また適宜萬葉集・家持集を参考として記した。

(一) 萬葉集にある歌(表A参照)

(1) 十・2056 (『夫木』十・3991 家集 人丸)

天川①はし打わたす②いもか家に③たえすかよはん④時またす共(異同なし)

西本願寺本アマノカハ天川 ①打橋度ウチハシワタス ②妹之家道イモカヘノミチ ③不止通ヤマスコヨハム ④時不待友トキマケストモ

廣瀬本欠

人丸集84天河①はしうちわたす②いかいかに③やますかよはむ④時またすとも

人丸集I83あまの河①橋うちわたす②妹か家に③やますますはん④時またるとも

人丸集II47あまの川①たうちわたし②いもか家に③やますかよはむ④ときまたすとも

①は『夫木』は人丸集・人丸集Iに一致し、西本願寺本・人丸集IIとは異なる。②は『夫木』と人丸集の傍書・人丸集I・IIに一致し、西本願寺本とは一致しない。③は『夫木』は三本とも四句が「たえす」とあるが、西本願寺本も人丸集・人丸集I・IIも「やます」とあり「たえす」とある歌集・歌書は見当たらない。④は西本願寺本も人丸集も人丸集Iを除いて一致する(人丸集Iの④「またる」は誤写か)。一首全体を見れば『夫木』と一致する人丸集はない。家集という集付に従うならば、『夫木』が典拠とした人丸集は現存以外の人丸集であったことになる。当該歌は赤人集にも所収されているが、①②③とも『夫木』とは一致せず、別資料に依拠したようである。残りの十一首は異同箇所のみ掲げる。

(2) 十・2086 (十・3992 同(家集) 同(人丸))

ひこほしの①つままつ舟の引つなの たえんと君に我かおもはなくに(異同なし)

西本願寺本フマヨフツネ①婦喚舟之フマヨフツネ 廣瀬本欠

人丸集93①つままつ舟の 人丸集I92・II55・III454とも①妻よふ船の

(3) 十・2111 (十一・4135 家集 人丸) (例四) 既出参照  
①たまほこの君がつかひの②たおりたる ③なこの秋はき④見れと

あかぬかも (④見あかぬかも(永))

西本願寺本 廣瀬本 (例四) 参照。

人丸集100①玉ほこの②たをりたる③この秋はきは④みれとあかぬかも 人丸集I99②玉ほこの②たをりたる③この秋萩を④みれとあかぬかも 人丸集II67①たまほこの②手折たる③このあきはきは④みれとあかぬかも

(4) 十・2165 (三十二・1540 家集 人丸)

①河水に②川津なくなり夕されは ころもてさむみ③つま枕せん (異同なし)

西本願寺本①上瀬ル②河津妻呼③妻将枕跡香 廣瀬本欠

人丸集II13①河水に②かはつなくなり③つま、くらせむ

参考

家持集I298 かみかせにかはつなくなりゆふされは かわかせさむしゆふまくらせむ

家持集II93 かみつせにかはつなくなりゆふされは かわかせさむしゆふまくれせん

(5) 十・2193 (十四・5830 家集 人丸)

秋風の①日ことにふけは②みつくきの ③をかのくすはらいろつきにけり (異同なし)

西本願寺本①日異②水莖能③岡之木葉毛 廣瀬本欠

人丸集176①日ことに②ひさかたの③をかの木の葉も 人丸集I128①日ことに②わか宿の③岡のこのはも 人丸集I221①日ことに②久堅の③岡の木の葉も 人丸集II105①日ことに②水莖

の③岡の木の葉も 人丸集V11①日ことに②みつくきの③をかのくす葉も

(6) 十・2262 (十一・4131 家集 人丸)

秋萩を①ちらすしくれの②ふる比は ③ひとりおきゐてこふる夜そおほき

西本願寺本①令落長雨之②零比者③一起居而 廣瀬本欠

人丸集I151①おとす時雨の②ふる時は③ひとりおきゐて 人丸集II79①おとすなかめの②ふるころは③ひとりおきゐて 人丸集III259①チラスナカアメ②フルコロハ③ヒトリオリキテ

参考

六帖 おとすながめのふる程は・ちらすな雨のふるなへに 玉葉ちらす時雨のふる比は

(7) 十一・2418 (三十五・16616 家集 同(人丸))

①いかならむ神にぬさをもたむけはか わかおもふいを夢にたに見ん (異同なし)

西本願寺本①何名負(青)

廣瀬本①イカナラム

人丸集III428①イカナラン 参考玉葉集1731①いかならん

(8) 十一・2626 (三十三・15553 家集 人丸)

ふる衣①うちすつる人は秋風の たちくる時に②物おもふものを①うちすて人は(永)

西本願寺本①打棄人者②物念物其 廣瀬本①ウチステヒトハ②モノ

オモフモノソ

人丸集IV 141①うちつづる人は②ものおもふものを

(9) 十一・2630 (三十二・15371 家集 同(人丸))

①ゆひしひもとかむ日とをみ敷たへの わかこまくらに②こけをひにけり (異同なし)

西本願寺本①結紐②蘿生来 廣瀬本①ムスフヒモ②こけおひにけり

人丸集IV 143①ゆひしひも②こけおひにけり

(10) 十一・2744 (十九・7926 家集 同(人丸))

すすきとる①あまの灯②よそにたに みぬ人ゆゑに③こふるころ哉

(異同なし)

西本願寺本①海部之燭火②外谷③恋比日

廣瀬本①アマノトモシヒ②ヨソニタニ③コフルココロ

人丸集II 545①あまのたくひの②ほのたに③こふるころかな

人丸集IV 178①あまのとし火③よそにたに③こふるころ

(11) 十二・2969 (三十三・15514 家集 人丸)

①ときころもおもひみたれてこふれとも ②なとなかゆへと③とふ

人もなし (異同なし)

西本願寺本①解衣之②何之故其跡③問人毛無

人丸集I 1①とき、ぬの②なとなかゆゑと③いふ人もなし 人丸集

I 1①とき、ぬの②なそなにゆへと③問人もなき 人丸集II 29

6①とき、ぬの②なそ何ゆへと③とふ人もなき 人丸集IV 138①

ときころも②なとなかゆへと③、ふ人はなし

(12) 十二・3003 (十三・5099 家集、万十二 人丸)

①夕つくよあかつきやみの②ほのかにも 見し人ゆへに③恋ひわたるかも(宮欠 ③恋わたるかな(永))

西本願寺本①夕月夜②不明③戀渡鴨 廣瀬本①ユフツクヨ②ホ

ノノニ③コヒワタルカモ 人丸集欠

以上の(1) (12)を、一首全句が一致する人丸集をみると

人丸集と一致するもの(2)

人丸集Iと一致するもの

人丸集IIと一致するもの(4)

人丸集IIIと一致するもの(7)

人丸集IVと一致するもの(8) (9)

人丸集Vと一致するもの

どの人丸集とも一致しないもの(1)(3)(5)(6)(10)(11)

どの人丸集にも所収されないもの(12)

となる。また句ごとの一致をみると「人丸集19(20) / 25

(一致句数 / 所収歌数×5 括弧内は傍書を入れた数。以下同)、人丸集I

22 / 35 人丸集II 29 / 40 (重複歌一首含む) 人丸集III 13

(14) / 15 人丸集IV 18 / 20 人丸集V 4 / 5」となり、大

きな差は見られないが、所収歌数が多い人丸集IとIIを見ると、や

やIIが高いといえるが、ここでは特に強い結びつきが推定される人

人丸集はないと言ってよいであろう。(4)はⅡ類のみに、(7)はⅢ類のみに所収される歌であり、それぞれと一致しているが、数は少ないのでこれを以て依拠したとは言いがたい。どの人丸集とも一致しない歌が六と多く、(12)のようにどの人丸集にも所収されない歌もあつた。『萬葉集』との異同も多く、『夫木』独自の訓もあり、これらを考えれば、『夫木』は、現存人丸集以外の人丸集に依拠したと思われる。

(二) 萬葉集にない歌(表B参照)

集付に家集とあるが、『萬葉集』に見えない歌が十六首ある。次にそれを掲げる(数字は『夫木』の巻次と新編国歌大観の歌番号である)。

(13) 四・1375 (同(家集) 同(人丸))

春かすみたなひく山の桜花 はやく①みましをちり過ぎにけり

(①みしを(永))

人丸集Ⅱ25春かすみたなひくやまのさくらはな はやくみてまし  
散過にけり

人丸集Ⅲ56ハルサメニニタナヒク山ノサクラハナ ハヤクミマシ  
ヲチリススキニケリ

人丸集Ⅳ110 春霞棚引山桜花 はやく見ましをちりすぎにけり

人丸集ⅡⅢⅣにあるが、ⅡⅢには異同がありⅣと一致する。

★(14) 七・2570 家集 人丸

あすよりはそとものをたに袖ぬれて ①とみくさのさなへとりつへ

らなり (①水くさの(永))

人丸集になく、秘蔵抄・蔵玉集<sup>8</sup>にある。

(15) 十三・5346 家集 人丸

秋くれはかふかの山に立きりを 海とそ見つる波たたなくに

(異同なし)

人丸集Ⅳ57秋くれはかふかの山にたつきりを うみとそみけるな  
みた、なくに

ⅡⅢにもあるが、歌句が一致するのは(小異あり)Ⅳのみである。

(16) 二十・8382 家集 人丸

朝またきわかうちこゆる立田山 ふかくもみゆる松のみとりか

(異同なし)

人丸集238あさまたきわかうちこゆるたつた山 ふかくもみゆる  
松のみとりか

人丸集Ⅱ・Ⅴにもあり歌句異同なし。人丸集以外には『雲葉和歌集』

(歌句小異)にある。

(17) 二十・8432 家集 人丸

あさなくたつ河霧のさむきかも ①たかはら山のみちそめけむ

(たかつら山<sup>は</sup>の「つ」左見消。「つ」と書いてその上に濃く「ハ」と書く(宮))

人丸集Ⅱ131 あさなくたつ川霧をさむみかも たかはらやま  
のみちそめけむ

人丸集Ⅳにもあり、人丸集Ⅱと歌句に異同なし。

(18) 二十・8797 家集 人麿

ほととぎす啼さほ山の松の葉の ねんころみまくほしき君かな

(異同なし)

人丸集Ⅳ69 ほと、きすなくさほ山のまつのねの ねむころ見ま  
くほしき、みかも

人丸集ⅡⅢにもあるが歌句に異同があり、最も近いのは人丸集Ⅳで  
ある。

(19) 二十・8959 同(家集) 中納(人丸イ) 言家持卿

もかみ山すかけせしより心ありて まもりかへせるやかたをのたか

(異同なし)

人丸集Ⅱ231もかみ山すかきせしよりこゝろありて まもりかへ

せるやかたおのたか (異同なし)

人丸集Ⅱのみにあり異同もない。

【参考】 家持集Ⅰ295 もかみやますかけせしよりこゝろありて

まもりかへせるやかたをのたか

(20) 二十一・9287 家集 人丸

うちはへてあさ風さむの冬によや ①ましろに霜のおけるあさみち

(①ましろみ「み」は「尔」の崩し字に似る字形〈宮〉)

人丸集236うちはへてあな風さむの冬の夜や ましろにしものお  
ける朝みち 人丸集Ⅱにあり。人丸集と異同なし。人丸集Ⅴにもあ

り、歌句に異同あり。

(21) 二十三・10343 家集 人丸

うちの海の釣する海士の①舟に乗て 乗りにしこころ常に忘す

(①船にのり〈宮・永〉)

人丸集Ⅱ520うちのうみにつりするあまのふねにのり のりにし  
こゝろつねにわすれす

人丸集ⅢⅣにあるが歌句が近いのは人丸集Ⅱである。

(22) 二十五・11717 家集 人丸

すまの浦につるの①よひこのあるときは これやちよへんものとや  
は見る (①かひこの〈永〉)

人丸集249すまの浦につるのかひこのあるときは これが千世へ  
んものとやはみる

人丸集Ⅱ591すまのうらのつるのかひこのあるときは これか千

世へんものとやはみる

人丸集・人丸集Ⅱ・Ⅴ(歌句異同あり〈小異〉)にあり、すべて二句

が「かひこ」である。

★(23) 二十八・13443 家集 同(人丸)

はま萩のおひしところふみ分て 夕きりかくれたつそなくなる

(異同なし)

人丸集にはなく、『夫木』のみに所収される。

(24) 三十・14282 家集 人丸

ささ波や大津のみやは名のみして かすみたなひき宮木もりなし

(異同なし)

人丸集Ⅰ59さ、浪のおほくのみやはなのみして かすみたなひ  
き宮き守なし

人丸集Ⅱ218さ、浪やおほつのみやは名のみして かすみたなひ  
く宮木もりなし

人丸集Ⅲ718サ、ナミノオホツノ宮ハナノミシテ カスミタナヒ  
キヒヤキモリナムシ

人丸集ⅠⅡⅢⅤにあるもそれぞれ歌句に小異あり。猶『拾遺集』に  
もあるが異同あり。

(25) 三十一・14635 家集 人丸

いへの井の①玉分さとにいもをおきて こひやわたらんなかき春日  
を(①たまわけのさとに(永))

人丸集Ⅱ358いゑの井のたまわけさとにいもを、きて こひやわ  
たらむなかきはる日を

人丸集Ⅳにもあり、歌句の異同なし。

(26) 三十一・14816 家集 人丸

あつまちの①もろこしのさとにおりてたつ きぬをやからの衣とい  
ふらん (①もろこし里(宮))

人丸集270あつまちのもろこし里におりてたつ きぬをやからの  
衣といふらん

人丸集Ⅱ 人丸集に同じ(傍書なし)

(27) 三十二・15352 家集 人丸

うちわひてひとりねたれはますかかみ とるとゆめみついに①あ  
ふかも (①あはんかも(永))

人丸集Ⅱ363打なひき人もねつれはますか、み とると夢にみつ  
我こひまさる

人丸集ⅡⅢⅣにあるも歌句異同あり。Ⅲ・Ⅳ句の結句「いもにあふ  
かも」。最も類似するのはⅣである。

(28) 三十三・15586 家集 人丸

しほ衣あまのみもとをおもひける うき世にふれはきぬ人もなし  
(宮欠。永異同なし)

人丸集Ⅱ557しほころもあまのみかとそおもひける うきよにふ  
れはきぬ人もなし 人丸集Ⅱのみにあり、歌句に小異あり。

以上をまとめると、十六首のうち、人丸集Ⅱは十四首を所収し、  
残りの二首はどの人丸集にも所収されていない歌である(★印を付  
した歌14・23)。歌句に小異はあるというものの、先の結果と

合わせて、『夫木』は人丸集Ⅱ、即ち二類本系統の一本ではないか  
と考えられるのである。

国名隠題歌が十六首の内に三首あり(③かうち ⑥やましる ⑧

かひ)、これから、『夫木』が典拠とした人丸集は国名隠題歌を所収  
する集であったことは確かで、人丸集のうち国名隠題歌を所収する

のは一類本の②、二類本、Ⅴ類本であり、人丸集Ⅱは二類本系統で

あるから、矛盾しない。(14)や(23)のようには現存人丸集に見えない、集付・作者名を「家集・人丸」とする歌があり、これらは現存人丸集の脱落とも考えられるが、やはり伝存しない人丸集と考えるべきであろう。

国名隠題歌は『夫木』の人丸歌に五首見える。このうち二首は集付が「雲葉」となっているので、これは『雲葉和歌集』経由とみてもよい。残りは(16)(20)(22)の三首で「かうち・やましろ・かひ」を詠み込むのであるが、『夫木』の題は「たつた山・あさみち・すまのうら」である。

『夫木』の編者は人丸集の国名隠題歌にはあまり関心を持たなかったようで、六十七首のうち、僅か三首のみを採取した。『夫木』編者のみならず、人丸集の編者以外は国名隠題歌にあまり興味を持たなかったようで、六十七首のうち人丸集のみ所収は三七首もある。また『続古今集』『雲葉和歌集』『万代和歌集』『秋風集』など、反御子左家の歌人が関わる歌集に比較的多く取られていること、由阿の選んだ『六華集』に一首であるが採られていることが興味深い。ともあれ、『夫木』人丸歌に三首とはいえ、「家集」として国名隠題歌が採られていることは、『夫木』が典拠とした人丸集はこの歌群を持つ系統であったことを示唆する。

人丸集は数十種あったといわれ、現存人丸集はその一部であるから、そのどれかに依拠したという可能性は極めて低いと考えるべき

ではなからうか。

## 五 萬葉集を典拠とする人丸歌

『萬葉集』中の人麻呂歌八十九首のうち、『夫木』に作者名を「人丸」と記し、所収される歌は四十五首である。その他に人麻呂作であるが、『夫木』では作者名が「人丸」でないものが、六首ある。これらは『萬葉集』の集付も正しく記されている(『夫木』において『萬葉集』の集付は概ね正しく記される)にもかかわらずなぜ作者名が正しく記されなかったのであろうか。

【例五】二・170〈或本歌一首〉(二十七・12842 万二  
読人不知)

しまみやのまなの池なるはなちとり 人めにこひていけにく、らす

(宮異同なし 永欠)

西本願寺本 シツマミヤ 嶋宮 マカリノイケノ 勾乃池之 ハナチトリ 放鳥 ヒトメニコヒテ 人目尔戀而 イケニク、ラス 池尔不潜 カラス

西本願寺本と比べると初句二句に異同がある。他の萬葉集古写本と比べると、初句は金沢本・類聚古集・廣瀬本、紀州本に一致し、二句は金沢本・紀州本左訓・廣瀬本に一致する。金沢本とは結句に異同があり、廣瀬本とは全句一致する。二句は次点本系諸本においても「勾乃池之」を「まなのいけなる」とまりのいけの「マカリノイケノ」と三種の訓があり、『夫木』と同訓は古文獻では『綺

語抄』・『五代集歌枕』・『袖中抄』にある。当該歌は167の反歌とされているが、『夫木』が依拠した萬葉集古写本が次点本系であるなら、167に訓がなかったであろうし、167に作者名が記されているが167・168・169番歌の三首が間にあり、作者名に気付かず「読人不知」としたと考えられる。この作者名の不備から『夫木』が依拠したのは家集を初めとする歌集・歌書ではなく、次点本系の萬葉集古写本であったと類推されるのである。

当該歌以外の五首をみると「201・256・262」に170番歌と同様の現象が見られる。即ち201番歌は199番歌の反歌、256番歌は「柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首」歌群の末尾の歌、262番歌は261番歌の反歌なのである。ところが残る二首、235・428番歌はそれぞれの歌の直前に作者名が記されている。これはどう考えたらいいのであろうか。

235番歌は『夫木』に『六帖』と明記され「おほきみは神にしませはあまくのみかつきかうへにいほりすらしも」と歌も一致する。故に『六帖』からの採取であり、『六帖』では集付も作者名も記されない。残りの一首428番歌はどうであろうか。

428番歌は集付も正しく「万三」と記され、『萬葉集』の他に依拠した文献を示す集付はない。

【例六】三・428（十九・7870 同 万三 同（読人不知））  
かくらくのはつせの山の山きはに いさよふくもはいもにかもあら

ん

西本願寺本コモリクノ隠口能 泊瀬山之ハツセンヤマノ 山際尔ヤマノハニ 伊佐夜歴雲者イサヨフクモホ 妹鴨有牟イモニカモアラム

初句は類聚古集・古葉略類聚抄・紀州本・細井本二・廣瀬本「カクレヌノ」、京大本左代緒「カクラクノ」、西本願寺本「コモリクノ（コモリ青）」の三種があり、『夫木』と同訓は京大本左代緒である。二句も「はつせ」「とませ」と両訓あり同訓は、古葉略類聚抄以外の萬葉集古写本や綺語抄をはじめとする古文獻も同様である。三句「やまきはに」は類聚古集・古葉略類聚抄・紀州本・細井本二に一致し、西本願寺本では「ノハ」は「モト青」で初句と同様仙覚改訓を表す。結句は萬葉集古写本「イモニカモアラム」に一致する。『夫木』と歌句がすべて一致する萬葉古写本・歌集・歌書はないが、仙覚校訂本の影響は受けていないことは明らかである。作者名が読人不知と記されていることに鑑みれば、当該歌は萬葉集古写本以外の歌集・歌書に依拠し、それが読人不知であったと思われるが、これ以上は不明というほかはない。

『夫木』の萬葉歌は、次点本系萬葉集古写本に依拠すると思われる、それ以外に、人丸集を初めとする私家集、『六帖』を嚆矢とする私撰集など、多くの歌集に依拠したと言えるであろう。

## 六 新点歌について

前節において、『夫木』には萬葉集古写本に依拠したと推定される萬葉歌があり、それは仙覚校訂本の影響を受けない次点本系であろうと述べた。さらに仙覚校訂本の影響の有無を、新点歌や改訓から検討してみることにする。

『夫木』中の新点歌は、卷三・249、十・1890、十三・3236、3305の四首である。そのうち長歌の二首を除く二首は仙覚校訂本の影響を受けているであろうか。1890番歌については既述したので、ここでは残る一首、249番歌について考えてみたい。

【例七】二・249（二十六・12179 万三 人丸）

みつの崎なみをかしこみこもりえの舟こく君か①ゆくかのしまに

（宮異同なし）①ゆくかたのしまに（永）

西本願寺本<sup>ミツノサキ</sup> 三津崎<sup>ナミツカシコミ</sup> 浪矣恐<sup>コモリエノ</sup> 隠江乃<sup>フネコクキミカ</sup> 舟公<sup>ユクカノシマニ</sup> 宣奴嶋尔（大矢本ユクヤ）

ヤ

廣瀬本訓なし（本文左に別筆「ミツノサキナミヲカシコモリエノフネコクキミカユクカヌジマニ」あり）

当該歌は新点歌で、萬葉集古写本では、大矢本に結句「ユクヤ」とある以外は、異同はない（仮名遣いの違いを除く）。『夫木』も永に結句「ゆくかたの」とある以外の異同はない。『夫木』においては原撰本からこの訓であったとおぼしい。このように西本願寺本以下の仙覚訓とほぼ一致するのである。この訓を鑑みて、『夫木』は仙

覚訓を受容したと判断すべきであろうか。因みに当該歌は『夫木』以前に所収する文献は『名寄』のみであり、それも原撰本に近い細川本になく、静嘉堂本・宮内庁本に存する<sup>11)</sup>。

『夫木』所収新点短歌は1890番歌と249番歌の二首である。両首とも集付は「万十」「万三」と正しく記されている。作者名は249番歌は「柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首」の初めの歌であり「人丸」と記される。1890番歌は作者名を記さない巻十であるが、1896番歌の左に「右柿本朝臣人麻呂歌集出」と記され、それは当該歌から始まる七首の歌群を指すとされ、作者を「人丸」としたのである。

二首とも無訓であったので、人丸集に所収されることはなく、直接『萬葉集』から採歌されたのであろう。そしてそれはいかなる写本であったのか。新点訓と一致すれば、それは仙覚校訂本系に依拠し、仙覚訓を受容していると判断してよいのであろうか。1890番歌は明らかに仙覚訓と異なり、長歌の考察においても『夫木』所収萬葉歌は仙覚訓を受容していないという結論を得た。この249番歌一首のみの一致によって『夫木』が編纂時に仙覚校訂本の影響を受けていたとは言い難い。新点と同じ訓が仙覚以前に確認できることの可能性については新谷秀夫氏の指摘がある<sup>12)</sup>。

この249番歌は、仙覚校訂本の影響を受けずに仙覚訓と一致した訓を付したのか、或いは『夫木』の書写の過程で仙覚校訂本系の

一本から加えたと考えるのが適切であるのか、本稿で取り上げた三写本においても異同がないことから、前者と考えるべきであろう。次に改訓を検討し、仙覚訓の影響の有無を見てみることにする。

## 七 改訓について

『夫木』中の短歌の改訓(『校本萬葉集』に「青・モト青・モト青カ」と記されたもの)歌は四十一首四十七句である。この内改訓と一致する歌句は四首四句であった。この数からも、『夫木』所収の短歌が、改訓を受容している可能性は低いと予想されるのであるが、この一致する四首四句について、改訓を受容していない可能性について考察する。

【例八】一・40(二十五・11606(伊勢国にみゆきるとき、京にとまりて 万一 同(人丸))

①あみの浦にふなのりすらん②つまともの たまものすそにしほみつらんか (②乙女子か(宮) あまともの(永))

西本願寺本①嗚呼見乃浦尔 船乗為良武 ②嬌婦等之

珠裳乃須十二 四寶三都良武香

廣瀬本①オミノウラフナノリスラム②アマトモノ タマモノスソニシホミツラムカ

『夫木』の初句は「あみの浦に」で三本とも一致する。西本願寺

本が「ア」を「モト青カ」とし、類聚古集「ヲミノウラニ」紀州本「オヲミノウラニ」冷泉本「オミノウラニ」廣瀬本「オミノウラ」とする。人丸集ではⅣ以外は所収するが「みをうみに・みをのうらに・おみのうらに・アラノウラニ・あみのうらに」と全て異なり、Ⅴ類本のみが一致する。『夫木』以前の当該歌を所収する古文獻(拾遺集・六帖・五代集歌枕・名寄など)には「アミノウラニ」はない。

ところが、三句「つまともの」は、類聚古集・紀州本に一致し、西本願寺本は「オトメラカ」である(『夫木』が三本とも異なっているのは書写の過程で改められていったものか)。仙覚訓を受容したとすると三句も一致してはならないのであるが、一致する『夫木』写本はない(『夫木』の萬葉歌の仙覚改訓歌句は、このように一首の中で改訓と的一致不一致がみられることは既に述べた)。こういった振れは往々にして見られる。これは一部の歌句のみ仙覚校訂本系により改めたと考えるのは不自然であり、仙覚訓と一致する訓を持つ一本が存在したと考えるべきであろう。人丸集はⅤ類本の初句のみが『夫木』と一致したのであるが、三句以下が「わきもこがころものすそにしほやみつらん」とあり全く異なる歌句である。Ⅴ類本の成立とも関わるが、書写奥書に従えば弘安四年(1821)、仙覚の業績が流布する以前となり、初句の訓が仙覚以前に存在したことを推定させるものとなる。また『名寄』においても細川本に「本集云持統幸紀伊国時留京作哥云々家集云詞書伊勢のおほみゆきに京にてよめるといへり」

という左注がある。「本集」とは『萬葉集』を指し、『名寄』は『萬葉集』と家集すなわち人丸集を見ていたことを表す。『名寄』にある通り人丸集Ⅱ以外には「伊勢国云々」の詞書が存在するのである。これは人丸集が依拠した『萬葉集』に「伊勢国」とあり、『夫木』もその系統の『萬葉集』に依拠したのではないかという事を推定させるものである。

【例九】三・430（二十四・10996 万三 柿本人丸）

八雲たついつものこらかくろかみは よしのの河のをきになつさふ  
（異同なし）

西本願寺本 八雲刺ヤクモクダツ（タツ青） 出雲子等イツモノコラカ 黒髮者クロカミハ 吉野川ヨシノカガ 奥名豆颯オキネツツサフ

廣瀬本欠

初句の「たつ」が西本願寺本で青訓である。類聚古集・古葉略類聚抄・紀州本などの次点訓は「さす」であり、他の歌句も異同はない（当該歌は初句以外は古写本間の異同はない）。当該歌は人丸集Ⅲのみに所収されそこでは「たつ」とあるが、集付「家集」がなく、萬葉集古写本からと思われる。人丸集Ⅲに「たつ」とあることは、平安期には「たつ」という訓が存在したことになるか。なお綺語抄・袋草紙・和歌一字抄・五代集歌枕などの古文獻も「やくもさす」であるが、『名寄』には「八雲たつ」とある。これは原撰本に近い細川本にはなく高松宮本・宮内庁本に見える歌であり、書写の過程で増補された可能性もあるが、高松宮本は細川本と極めて近い写本である。

【例十】十・2238（12・4878 万十 人丸）

あまとふやかりのつはさのおほひはを いつこもりてか霜のふりけん

西本願寺本 天飛也アマトフヤ 鴈之翅乃カリノツハサノ 覆羽之オホヒノ 何処漏香イツコモリナカ 霜之零異牟シモノツリケム（ケム）モト青）

廣瀬本欠

結句「ケム」が改訓と思われるが、これは元暦校本に「ふりけむ」とあるので、次点訓に既に訓まれていたということになる。

【例十一】十一・2445（23・10366 万十一 人丸）

近江の海しつく白玉しらすして 恋せしよりはいまそまされる

西本願寺本 淡海海アワミノウミ 沈白玉シツシラタケ（ク）青 不知シラカシ 徒恋者コヒセシヨリハ 今益イマツマキレル

廣瀬本 アフミノウミシツムシラタマシラスシテ コヒセシヨリハイ

マソマサレル

『萬葉集』中に本文『沈白玉』は二例ある。七・1317番歌は西本願寺本に「シツク（ク）モト青カ」とあり、仙覚の改訓であったことを示すのであるが、七・1320番歌は西本願寺本で「シツク」と訓むが青訓ではない。この歌は『歌経標式』に「旨都俱旨羅他麻（旨）」とあり、奥義抄にも「しつく」とある。2445番歌においても仙覚以前に「しつく」という訓が存在した可能性はあろう。

人丸歌と改訓が一致する歌は四首四句であった。これらの子細にみると改訓と一致する歌句があっても他の歌句が西本願寺本と一致

しない、捻れ現象の歌、すでに次点本系の写本や平安期成立の歌集に見える訓であるもの（平安期成立であつても、書写の過程で校正の影響を受ける可能性があり、判断には慎重を要するが）があり、これらを除くと改訓と一致するものは一首一句である。これは『夫木』の改訓四十一首四十七句からみれば僅かであり、このわずかな例をもつて仙覚の影響を受けていたと断じることには慎重でなければならぬ。

仙覚以外の人の付した訓が、仙覚訓と偶然に一致した（仙覚以前以後いずれであつても）と考えることも可能であろう。『夫木』の萬葉歌は仙覚を受容している可能性は極めて低いと思われるのである。

長歌の考察でも述べたが、<sup>16</sup>『夫木』には独自の訓が存在した。短歌にも独自訓が見られるが、その数は長歌に比して少ない。それは古次点の段階で始どの短歌に訓が付されていたので無訓が少なく、独自に訓を付す歌が少なかった故かと思われる。

長歌に比して独自性の少ない短歌であるが、これまで挙げた歌の中でも『夫木』独自の訓は存在した。【例四】に挙げた2111番歌の四句「なこのあきはき」の「なこの」は『夫木』独自の訓であった。『萬葉集』は人丸集の当該歌の前後を見ても、誤写を誘引する歌句を持つ歌はない。『夫木』三写本及び刊本も異同はなく、成立時からと考えられる。

二〇〇三番歌の二句「丹穂面」を「にほへるおもに」（にほへるおもへ宮・永）と訓む。これは元暦校本・紀州本「にほへるいもは」

類聚古集「にほくるいもは」と訓まれているが（西本願寺本「二ノホノオモハ（傍線部青）」、「いも」よりは「おも」が本文に即した訓となるのではなからうか。『夫木』の訓は他の歌集・歌書に見えないが、非仙覚本系「にほへるいもは」から仙覚校訂本系「二ノホノオモハ」への過渡期的な訓といえるのではないだろうか。

他に、『夫木』以前には引用されていない萬葉歌もかなり多くを数える。<sup>17</sup>これらにも『夫木』独自の訓の存在が窺われるが、それについては稿を改めたい。

## 八 終わりに

『夫木』所収短歌の、作者名を人丸とする歌を中心に討究してきた。一千首を超える短歌のごく一部であるが、『夫木』所収萬葉集短歌の概要が明らかとなった。

①『夫木』写本と刊本には長歌と同様乖離があり、刊本は仙覚校訂本により修正されている。

②集付に「家集」とある歌には、刊本において修正が殆ど加えられず、『萬葉集』と認識されていなかったと思われる。

③『夫木』が依拠した人丸集は国名隠題歌を含む、二類本系の伝存しない一本である。

④『夫木』が依拠した『萬葉集』は非仙覚本系の現存しない、か

なり特異な訓を持つ一本である。

⑤新点・改訓の影響は受けていない。ごく一部に新点・改訓と一致する訓があるが、それは仙覚と関わりなく付せられたものと推察される。

『夫木』の依拠した『萬葉集』は現存しない非仙覚本系の一本であり、非仙覚本系と仙覚校訂本系の過渡期の空白を埋めるべき存在であるといえるであろう。

仙覚の業績が都に浸透していくまでの間、座視していたのではなく、『萬葉集』の訓点に心血を注いだ人物が、都周辺にもいたことは認めてよいが、その業績は現在『萬葉集』の写本としては伝えられていない。『名寄』の考察でも述べたが、<sup>(18)</sup>大量の萬葉歌を所収する中世の私撰集には、伝存されずに消失した、非仙覚本系の訓が多ク保存され、非仙覚本系写本が多く失われた現在、貴重な資料である。所収萬葉歌が大量である故に、その解明はなかなか進まないが、少しずつその様相が明らかになるであろうことを期待して擲筆する。

## 注

- ①「『夫木和歌抄』所収萬葉歌について―長歌訓の特質と価値―」『上代文学』一一二二号 二〇一八
- ②古典ライブラリー 二〇一四 以下歌集歌書については同書に拠る。
- ③『新編国歌大観』は静嘉堂本を底本とするが、永青文庫本、書陵部

本、寛文五年版本による校訂を加えた本文である。本稿では写本  
の特性をも考察するために、各写本の本文を用いた。静嘉堂本―  
山田清市・小鹿野茂次「作者分類 夫木和歌抄 本文篇」(風間書  
房 一九六七)に基づき、原本を調査。書陵部本―圖書寮叢刊『夫  
木和歌抄』一―五 索引上下 (宮内庁書陵部 一九八四―一九九  
三年)に基づき、原本を調査。永青文庫本―細川家永青文庫叢刊  
5『夫木和歌抄』上下 別冊初二句索引 (汲古書院一九八三―一  
九八五)。刊本―寛文五年版『校本萬葉集 新增補』十一―十  
六 第二刷(岩波書店一九九五―一九九五)に基づき、大阪府立  
図書館蔵本を調査。以下静嘉堂本―静、書陵部本―書、永青文庫  
本―永 寛永五年版本―刊本・刊の略号を用いる。

④池原陽齊「赤人集による萬葉集本文校訂の可能性」『萬葉集訓読の  
資料と方法』第二部第一章 (笠間書院 二〇一六) 池原氏は同  
書の中で、廣瀬本の訓は「朱で傍記され別筆」であり、「後補訓で  
あることは疑いない」とする。

⑤『名寄』も万治二年刊本において仙覚本系による修正が行われてい  
ることは、以下の拙稿において述べた。「中世名所歌集にみる『萬  
葉集』長歌の享受と特質―細川本『歌枕名寄』を中心として」(『上  
代文学』一一七号 二〇一六) 「『歌枕名寄』所収萬葉集仮名表記  
長歌について―非仙覚本と仙覚本の間をつなぐもの」(『万葉集伝  
本の書写形態の総合的研究 論文編』人間文化研究機関国文学研  
究資料館 共同研究(特定研究報告書 二〇一七))

⑥『古歌抄』鎌倉―室町期の冷泉家流古今集注釈書。『一葉抄』室町  
時代後期歌学書。三条西実隆編。『萬葉集』短歌四一二六首を所収。  
⑦赤人集I・II・IIIとも「あまのかはうちはしわたすいもかいへと、  
まらすかよへときましたとも」(『私家集大成』CD・ROM版(古  
典ライブラリー エムワイ企画 二〇〇八))

(8) 秘藏抄―異名和歌集。編者未詳。永享十年(1388)までに成立か。蔵玉集―異名和歌集。編者未詳。十四世紀以後、或いは室町時代初期に成立か。

(9) 類聚古集には170の題詞「或本歌一首」のしたに「反哥 日並皇子尊参宮時 人麿」とあり、類聚古集の編者は「反歌、作者人麻呂」と理解していた。

(10) 注(1) 既掲拙稿参照。

(11) 細川本は省略の多い写本であるので、省略されたとも考えられる。静嘉堂本及び宮内庁本以下の流布本も本文表記(傍訓あり)で所収する。訓は静嘉堂本「ユリカタノ」宮内庁本「ユクカタノ」

(12) 「平安・鎌倉の『萬葉集』―享受・伝来という視点からの素描―」『國文学 解釈と教材の研究』學燈社 二〇〇四・七月号

(13) 注(1) 既掲拙稿参照。

(14) 林勉監修『西本願寺本萬葉集(普及版)』(おうふう 一九九四)によれば「ケム」に「茶・別青」とある。

(15) 沖森卓也・佐藤信・平沢竜介・矢嶋泉『歌経標式 影印と註釈』(おうふう 二〇〇八)。引用は「真本 東京国立博物館本」による。

(16) 注(1) 既掲拙稿参照。

(17) 渋谷虎雄『古文献所収万葉和歌集成』(平安・鎌倉期、南北朝期)(桜楓社 一九八二、一九八三)の調査に拠る。

(18) 注(5) 既掲拙稿参照。

〔付記〕本稿を成すにあたり、閲覧を御許可下さいました、宮内庁書陵部、静嘉堂文庫に記して深謝申し上げます。なお本稿は万葉文化館委託共同研究「万葉集を訓んだ人々・人々の読んだ万葉集」研究会における発表を骨子とする。席上御教示を賜りました諸先生方に記して深謝申し上げます。

表 A

人丸集の有無(○は当該歌を所収 空欄は所収せず)を表す。

			人丸集	人丸集 I	人丸集 II	人丸集 III	人丸集 IV	人丸集 V
1	10	2056	○	○	○			
2	10	2086	○	○	○	○		
3	10	2111	○	○	○			
4	10	2165		○				
5	10	2193	○	○	○			○
6	10	2262		○	○	○		
7	11	2418				○		
8	11	2626					○	
9	11	2630					○	
10	11	2744			○		○	
11	12	2969	○	○	○		○	
12	12	3003						

(萬葉集巻次・歌番号)

表 B

人丸集にあり、萬葉集にない歌の有無(○は当該歌を所収。空欄は所収せず)を表す。

			人丸集	I	II	III	IV	V
1	4	1375			○	○	○	
2	7	2570	○					
3	13	5346			○	○	○	
4	20	8382	○		○			○
5	20	8342			○		○	
6	20	8797			○	○	○	
7	20	8959			○			
8	21	9287	○		○			○
9	23	10343	○		○	○	○	
10	25	11717	○		○			○
11	28	13443						
12	30	14282	○	○	○	○		○
13	31	14635			○		○	
14	31	14816	○		○			○
15	32	15352			○	○	○	
16	33	15586			○			

(夫木抄巻次・歌番号)